

ふしの会

山城6回 和田 修

ふしの会？

時…平成十七年十二月六日（火）十二時～

ところ…大津「魚忠」

あと一週間後に迫った「ふしの会」十二月の案内である。

我々山城第六回卒業生十五人でつくっている「ふしの会」もこの会合で二十三回を数える。

そもそも この会の母体は三十年前の大阪にさかのぼる。昭和五十年頃、働き盛りの山六生（山城第六回卒業生）が折々に集まってオダをあげていた。

それが経くでもなく、途切れるでもなく、と不定期に集まっていたが、〇〇年七月、呼び掛ける者があって、七名が梅田の飲み屋に集まった。二ヶ月後に全員同所に再会し、以後三ヶ月ごと、つまり三・六・九・十二月に集まり、呑み、食い、且つ語

ることが決められた。

以後、京都を中心に京阪神地区で一回も欠けることなく会は続いて、会員も多少増えてきた。

その間、誰からともなく、白川益雄先生（国語）に来ていただこう、ということになり、先生の快諾を得て今日に至っている。

それまで会の名称は便宜上山六会としていたが、先生に会の名前をつけていただくことをお願いしたところ、「ふし（二四）の会」と頂いた。

実は会員の大部分が先生の二年四組の生徒だったという訳。しかしこの「ふし」には

不二・二つとないこと

富士・富士山

不死・いつまでも長生きすること

武士・侍・もののふ

無事・健康で元気なこと

という意味がこめられているが、さらに「ふし」には

節・句切り

柴・山野に生える小さな雑木

不次・通

例に従わないこと

の意味もある。

今では上記すべての意味を含んだ最高の会名と、全員大いに気に入っている。

会の活動は、三ヶ月に一度みなが集まって食事をして駄弁る

だけ。

それでも毎回十―十三名が出席し、順繰りの幹事が苦心して選んだ料理とアルコールを楽しむながら人生観、病気の体験、趣味のこと等々、年甲斐もなくワイワイガヤガヤと騒いでいる。

会場の大部分は京阪神、特に京都が多くなるが、二十三回もやっている、中には、一泊で会員の所有する信州杓掛の別荘を訪ねたこともある。この時は二十八人乗りのバスを借り切つて、会員外（唯一回の例外）の山六生も加えて十五名で信州へ。白川先生の不参加が残念だったが、快晴の二日間に松本城・開智校・杓掛温泉・美ヶ原・蓼科・諏訪湖と初夏の信州を堪能することができた。

ふしの会は、自然発生的に成立したもので、会の規則は何もないが、決まりと言えれば次のような事であろうか。

一、三・六・九・十二月に集まって、会食する。

二、会には一切役員をおかない。

三、会食後、次の開催日と幹事二名を決め、幹事は次の例会が終了するまで責任を持つ。

四、新入会員は会員全員の合意により入会を認める。

五、会員は「山城高校第六回卒業男性」と白川先生のみとする。

会員は自営業を除いて全員現役を退いて趣味に生きている。

絵筆を持つ者、焼き物に熱を上げる者、篆刻を極めんとする者、その他薫製、漬け物、塩昆布作りに精を出す者、等々。

我々は丁度、今年古稀を迎えた（る）。いつまで長生きできるか分からないが、このように集まることのできる幸せを心に刻みつつ、できる限り永く「ふしの会」を続けたいと願っている。（オヤジも三中第十八回の卒業生で、山城新吾さんの父上等々と、一八（イッパチ）会を作って、よく集まっていたことを思い出しながら・・・）



山城 14回 岡本通雄